2010 年 11 月 24 日放送

漢方医人列伝「浅田　宗伯　①」

北里大学　東洋医学総合研究所　医史学研究部　　渡辺　浩二

今回から 2 回に分けて、幕末・明治前期の漢方界において著しい活躍をした浅田宗伯についてご紹介しましょう。今回は浅田宗伯の略歴とエピソードについて、次回はその学術と門人教育についてお話をいたします。

浅田宗伯は 1815 年（文化 12 年）年 5 月 13 日、信州筑摩郡栗林村、現在の長野県松本市に、祖父から続く医家の三代目として生まれました。名は直民、のち惟常。字は識比、通称を宗伯、そして生まれ故郷栗林村から号を栗園と称しました。

宗伯自身の自伝によれば、幼年時代はいかにも愚鈍で、四書五経を教えた師匠も首を傾げたとのことでした。ところが、15 歳の頃より自ら志を立てるようになり、中西深斎の弟子で高遠藩の藩医だった中村仲倧の門に入りました。18 歳で京都に遊学し、中西深斎の塾を中心に、吉益、川越、福井家などに出入りをして医を学び、その子弟とも大いに議論を交わしました。また経書を猪飼経所に、史学を頼山陽に学んでいます。

22 歳の時に江戸で開業しましたが、数年名を挙げることが出来ませんでした。この頃、宗伯という通称の由来となる幕府医官の本康宗円に出会いました。当時江戸の医学界で三大巨匠といわれた多紀元堅・小島学古・喜多村直寛の三人を紹介され、その後も医学では三大巨匠をはじめとした医学館関係者など、儒学の面では、安井息軒や芳野金陵などと交

わり視野を広げていきます。土佐藩邸での診療を経て、幕府においては 1855 年（安政 2 年）41 歳の時にお目見え医師となり、47 歳で十四代将軍家茂に謁見します。その後、1866 年（慶応 2 年）には 52 歳で御典医となり、和宮や天璋院をはじめ、大奥の信頼を集めて法眼となります。このように浅田宗伯は時代が明治維新へと激動していく中、その臨床手腕によって信頼を集め、町医者から法眼まで登りつめていくこととなります。次に幕府に認められた功績を紹介しましょう。

1865 年（慶応元年）8 月、フランス公使レオン・ロッシュに腰と脊椎の痛みがあり、あらゆる西洋医の名家といわれる医者の治療を受けても一向に効果が上がりませんでした。そこで幕府は宗伯に治療を命じ、宗伯は見事その原因をフランスでの落馬による打撲の後遺症が原因と見抜き、桂枝加苓朮附湯を処方します。通訳を通じて桂枝加苓朮附湯に使用される、桂枝・芍薬・蒼朮・茯苓・附子・甘草・大棗・生姜、8 つの生薬の薬能をそれぞれ示しました。これは現代でいう薬の情報開示に当たるものです。

宗伯の治験集『橘窓書影』からこの部分を抜き出しましょう。「桂枝は気を運らし筋脈を強壮にするものなり。芍薬は血を和して痛をゆるめるものなり。蒼朮は身体の濁湿を去りて関節を分利するものなり。茯苓は小便を通利して気血を順にするものなり。附子は身内の陽気を扶けて腰脊の痛を去るものなり。甘草は腹を和して諸薬を導くものなり。大棗・生姜の二品は、以上六品の薬性を混和して胃中の受容よろしからしめ薬力を身体に分布せしむるものなり」。実に要を得た説明といえましょう。幕末に西洋医学が認められ社会に浸透する中、宗伯は西洋医学の翻訳医書にもよく目を通しました。そのためフランス公使が何を求めているのかを知っていたのでしょう。レオン・ロッシュは安心して漢方薬を服薬し、病は 5 日ほどで良くなります。その後宗伯に対してフランス皇帝より時計 2 個、絨毯 3 巻が贈られています。ここに宗伯の臨床手腕は海外にまで響くこととなりました。

また、1866 年（慶応 2 年）、将軍家茂が大坂城で病に倒れ、西洋医が百方手を尽しましたが、その効果がないのみか、いよいよ悪くなりました。この時、宗伯も大坂への往診を命じられ、脚気衝心にて危篤状態と診断し、その 4 日後に将軍は薨去されました。その診断と予後が適中したため、名声はさらに加わり漢方医の面目を保つこととなります。

「良医にして良相」といわれた宗伯を伝えるエピソードもあります。1868 年（明治元年）年、王政復古、明治維新となり江戸幕府討伐の命令が下ったおり、宗伯は和宮と天璋院の密命を受け、和宮の密書を携え西郷隆盛に面会し江戸城下鎮静の願いを伝えたとのことです。

その後、最後の将軍慶喜に随い静岡に移りますが、1871 年（明治 4 年）、廃藩置県後は東京で診療を再開します。宗伯自筆の『橘黄年譜』などから年間の患者数を見ていきましょう。年間 1000 名を超えたのが 1848 年（嘉永元年）、34 歳の時です。1862 年（文久 2 年）、48 歳には 4500 名余りとなっています。1878 年（明治 11 年）、64 歳では年間 3 万人を超える膨大な人数となっており、同じく明治漢方界を牽引していた山田業広もその流行海内無比なり、と表するまでになります。都下の名声は尾台榕堂と二分したといわれています。

1875年（明治8年）には漢方医を廃絶する法律が出来ました。医術開業試験です。試験にはすべて西洋医学が採用され、これにより医師はすべて西洋医学の医師でなければならなくなりました。そのため、漢方医にも医術開業の道を開かせる請願運動が起こるようになります。山田業広、森立之、浅田宗伯などが中心となり漢方医の結社「温知社」を設立し、運動を牽引していきます。このようなときに浅田宗伯の名をさらに不朽のものとし、また漢方医を沸き立たせる事態が起きます。

1879年（明治12年）、65歳の時に明宮嘉仁親王、後の大正天皇がご降誕されたおり、宗伯は尚薬侍医を拝命します。親王は生後間もなく、全身痙攣を繰り返し、まさに危篤の状態に陥ったとき、宗伯の処方した巴豆と杏仁、二味の走馬湯により危機を脱することができました。このように名実ともに名医としての地位を確立します。

浅田宗伯は医師免許改正の請願運動が頂点を迎えるさなか、1894年（明治27年）、3月16日、満80歳の人生を終えることとなります。毎日200人の診察をこなしていたある日、病に倒れ、床につきます。病床につくやその日に「わが余命はあと 1 ヶ月」と予告して、亡き父の命日16日を心に決めて、その通り大往生を遂げました。

辞世の句が二首あります。

「この花の　大和心を失はず　咲き返りても貫かんとぞ思ふ」

「春といへば　いづこの花も時めくに　しほれてかへる人のあはれさ」

浅田宗伯の塾からは婿養子の浅田宗叔、家を継いだ浅田栖園らをはじめたくさんの弟子が輩出されています。特に大正から昭和期の漢方不遇の時期に漢方の灯火をつないだ人物には、東京の木村博昭、大阪の中野康章、京都の新妻荘五郎の 3 人がいます。これら 3 人の弟子達が漢方再興の口火を切ることになります。浅田宗伯こそは死してなお、漢方を伝えた大英傑といえましょう。